

# ハイデッガーはレイシストか

——「存在史的反ユダヤ主義」を検証する（1）——

田 鍋 良 臣\*

「今後の議論は私の解釈を反駁ないし修正するかもしれない。

私は、それを嬉しく思う最初の者となろう。」

ペーター・トラヴニー

## はじめに

2014年3月にハイデッガーの遺稿「黒ノート」が刊行されて以来、そこに記されていた「ユダヤ教（ユダヤ的なもの、ユダヤ人）」に関する批判的な文言をめぐって、活発な議論がなされている。問題になるのは、ユダヤ教が「計算的思考」や「破壊の原理」、あるいは「自滅」といった語に結びつけられている点である。「黒ノート」の編者であるトラヴニーは、こうした文言のうちに、いわゆる反ユダヤ主義の反映を指摘し、「存在史的反ユダヤ主義」と命名した。以後、この問題にかかわる研究者の多くがトラヴニーの見解を支持し、その一方で、少数ではあるが、こうした動きに異議を唱える立場も見られる<sup>1</sup>。だがそれらは総じて、「黒ノート」のユダヤ批判を相対化、ないしは周辺化する傾向にあり、トラヴニーが「たぶん無益だろう」<sup>2</sup>と評するように、問題の核心に迫るものとは言えない。こうした状況のなか、トラヴニーの解釈はもはや国際的な承認を得ているように見受けられる。たしかに、14～19箇所<sup>3</sup>とも言われる「黒ノート」の当該箇所のすべてを点検し、分析することは容易ではない。その主たる要因は、「黒ノート」の記述が断片的であるうえに、「ハイデッガー語」とも呼ばれる晦渋な文言で記されているためである。「黒ノート」のユダヤ批判を正確に「解説」するためには、背景となる思想動向を踏まえ、問題とされる文言の意味を一つ一つ慎重に確定しなければならない。

そこで筆者は、ひとまずトラヴニーの解釈に依拠して、「黒ノート」を精読することにした。その結果、トラヴニーの存在史的反ユダヤ主義という主張は、テキスト読解のレベルで、問題を抱えていることに気づいた。そうした箇所は多岐にわたるが、それらは共通して、「ハイデッガーの人種主義」をめぐる見解にかかわっている。トラヴニーはそれを、ナチズムの優生学的な人種主義との区別において、「存在史的人種主義」と規定し、存在史的反ユダヤ主義の主要な構成要素とみなしている。したがって、存在史的人種主義に関するトラヴニーの見解を確認し、それが「黒ノート」の記述とどれだけ異なっているかを照合することで、反対に、ハイデッガーのユダヤ批判の「真意」をよりはっきりと浮かび上がらせることができるのではないか、と考えるようにな

\*鳥取大学教育支援・国際交流推進機構教育センター 准教授

った。それがはたして、何らかの「反ユダヤ主義」と言えるのかどうかについても、この検証作業を通じておのずと判明するだろう。本稿は、その第一弾として、ハイデッガーとフッサールの関係をめぐるトラヴニーの解釈に取り組む。だがその前に、トラヴニーの主張する存在史的反ユダヤ主義なるものがいったい何であるかを、確認しておく必要がある。

## 1. 存在史的反ユダヤ主義とは何か

反ユダヤ主義とは、一般に、ユダヤ人（ユダヤ教、ユダヤ文化）に対する反感、憎悪であり、またそうした偏見に基づいてなされる言動や行動を指すものと考えられる（vgl. 11）。これはヨーロッパの歴史や文化、思想にとって根深く、周知のように、ナチス・ドイツにおいて最悪の結果を招いた。そのナチス政権下のドイツで、1933～34年の1年間とはいえ、フライブルク大学の総長を務めたハイデッガーの遺稿のなかに、ユダヤ批判の文言が見つかったのである。それゆえ、そこに「ナチ・プロパガンダの反響」<sup>4</sup>や「汚染」（12）を指摘することは、ある意味で自然な反応と言えるかもしれない。ただし、管見の限り、ユダヤ批判が初めて記されたのは1938年頃の「考察Ⅷ」であり、それ以前の「黒ノート」には、こうした記述は見られない。講義や講演・演説といった公の場でも同様である。この点についてトラヴニーは、「彼〔ハイデッガー〕は自らの反ユダヤ主義をナチ党員に対してすら隠していた」と述べ、その理由を、「彼の反ユダヤ主義はナチ党員のそれとは区別されていた」点に見ている（15f.）。つまりトラヴニーによれば、ハイデッガーは自らの反ユダヤ主義を自覚していたが、それは当時の「公共的な」反ユダヤ主義とは異質なものであり、いわば世人の誤解を恐れて隠蔽していた、というのである。この見解がどこまで妥当性をもつのかはさておき、まず確認すべきは、トラヴニーが反ユダヤ主義をめぐってナチズムとハイデッガーとの間に、共鳴する点だけでなく、何かしらの違いを見ている点である。ここに「ハイデッガーの反ユダヤ主義」が、とくに「存在史的」と形容される理由を求めることができるだろう。以上をまとめると、ハイデッガーは、当時の「支配的な議論」（60）の影響下にあつて、反ユダヤ主義をいわば換骨奪胎し、「存在史的に変形させる」（35）ことで、特異な考えをもつにいたつた。これが「存在史的反ユダヤ主義」と呼ばれるものの大略である。

### （1）存在史的人種主義

反ユダヤ主義をめぐるナチズムとハイデッガーとのこうした関係は、トラヴニーが「人種」概念を分析する場面で際立ってくる。トラヴニーによれば、ハイデッガーはたしかに、ナチズムの反ユダヤ主義にとって核心的な「人種思想」からは一貫して距離をとっている。ただし、「そのことは、彼〔ハイデッガー〕が『人種』の所与性を疑っていたことを決して意味するものではない」（39f.）。なぜなら、「黒ノート」（「考察Ⅲ」）には、「人種——歴史的な現存在の一つの必要な、間接的に自身を言い表す条件であるもの（被投性）」（GA94, 189）と記されているからである。つまり、ハイデッガーは、ナチズムの人種思想については評価しないが、他方で人種概念自体は、ナチ党員同様、人間の重要なあり方とみなしている。人種をめぐるトラヴニーのこのような見解のなかで、まさにナチズムとハイデッガーの共通点と相違点が浮かび上がる。ではハイデッガーは、ナチズムの人種主義イデオロギーの何を拒絶したのか。トラヴニーはこう続ける。

したがって、「人種思想」に対するハイデッガーの距離は、他の諸契機のうち「被投性」と

いう一つの契機を、〔ナチズムが〕理論的に絶対視したことにかかわっている。しかしそれは、「人種」が現存在に属するという見解にかかわるのではない。(40)

要するに、トラヴニーは、「ハイデggerは、決して人種思想それ自体を拒絶するのではなく、たんにその絶対視を拒絶しているにすぎない」(45)と主張する。だとすれば、ハイデggerの思索は、ナチスの人種主義と無関係なのか。そうではない。ここで注目すべきは、ハイデggerが受け入れたとされる「人種」概念の中身である。トラヴニーは、1934年夏学期講義でなされた、『人種』とは、遺伝や遺伝的血縁関係、生命衝動の意味での血に関するものとしての人種的なもの *Rassisches* だけではなく、同時にしばしば洒落たもの *das Rassige* をも意味する」(GA38, 65) という発言の「だけではなく」という部分を強調して、こう述べる。

ハイデggerは〔人種という〕概念の生物学的な意義を疑っていない。「人種」は「血に関するものとしての人種的なものだけではない」。この「血に関するもの」が存在することは、問われていない。(61)

実は、1934年夏学期講義を読めば、生物学的な人種概念は、その本質上「最高度に疑わしい」(GA38, 68, vgl. auch 109)とされているため、トラヴニーの見解には疑問が残る<sup>5</sup>。とはいえ、さしあたりここで重要なのは、ハイデggerが現存在の「必要条件」とみなした人種概念のうち、トラヴニーは生物学的な意義を見ている点である<sup>6</sup>。これは同時代のユンガーが、「労働者という人種」を生物学的な概念とみなさなかったことと対置される(60)。先ほど確認したナチズムとの関係に照らすなら、ハイデggerは、ユンガーとは異なり、人種の生物学的な意義を無批判に受け入れており、ただしそれを絶対視しない点にナチズムとの違いがある、と言い直すことができるだろう。そうであるなら、トラヴニーが指弾する汚染の問題は、まず、ハイデggerが生物学的な人種概念を承認した点、少なくとも疑わなかった点に向けられているものと思われる。そしてトラヴニーは、ハイデggerのこうした人種論について、ナチズムの差別的な人種主義と対比しつつ、以下のように特徴づけている。

もし「人種主義的」ということで、ハイデggerが、ドイツ人の「民族の肉体」を「人種的に」根拠づけることに基づいて、他の民族に対する優越性を導出したことを意味するなら、私の見解では、哲学者〔＝ハイデgger〕は、「人種主義」の非難から解放されなければならない。これに対して、「存在史の人種主義」が存するとすれば、ハイデggerが、存在史の立役者たちのトポグラフィにおいて、「人種」の概念を断念しようとはしていない点であろう。なぜなら、彼は、「人種」の**本来的な意義**がそもそも初めてあらわになるのは、存在史の一定の時期においてである、と信じたからだ。(62 Anm. 12)

「存在史の立役者たちのトポグラフィ」とは、哲学史において「ギリシア人」「ローマ人」「キリスト者」「ドイツ人」等が担った存在の問いをめぐる役割を指すのだが、そこに「ユダヤ人」も位置づけられる(vgl. 15, 26f.)。トラヴニーによれば、こうしたトポグラフィが、『人種』の**本来的な意義**によって規定されている。つまり、存在史において集合名詞で語られる「民族」の

地位や意義には、「人種」の評価が何かしらかわっており、それが「存在史的人種主義」と特徴づけられるのである。「存在史的ユダヤ主義」が、このような『人種』の存在史的概念を含んだものであるという洞察こそ、トラヴニーの解釈を導く基本的な視座だと言えよう(64) 7。

## (2) 1930年代後半の「生物学からの脱却」

とはいえ、存在史的人種概念が生物学的な意義をもつなら、ハイデッガーは民族の歴史的な意義を、遺伝学的な決定論に依拠して評価していることになりはしないか。もしそうなら、ナチズムの優生学的なイデオロギーから距離をとったという先ほどの見立ては、いくぶん怪しくなる。実際、トラヴニー自身、1934年夏学期講義での「血と土」や「肉体としての民族」をめぐる議論を引き合いに出して、ハイデッガーによる「ナチズムのイデオロギーへの接近」(40)を指摘する。だとしたら、ハイデッガーは、人種主義イデオロギーに対して、距離をとることと接近することを同時に行っていることになるが、これをどう理解すればよいか。絶対視をしない範囲で受け入れた、ということなのか。しかし、イデオロギーをわずかでも承認した時点で、両者の違いは本質的なものではなく、せいぜい程度の差でしかない。このあたりのトラヴニーの議論は、歯切れが悪く、混乱していると言わざるをえない。いずれにせよ、ここで注意すべきは、存在史的人種主義をめぐるこれらの議論が、主に総長期(1933~34年)のテキストに依拠してなされている点である。他方、すでに触れたように、存在史的ユダヤ主義と呼ばれるユダヤ批判の文言は、1938年頃に初めて記され、トラヴニーもそれを承知している(vgl. 15)。つまり、両者は記された時期が異なるのである<sup>8</sup>。にも拘らずトラヴニーは、両者を、何の説明もなく事もなげに結びつけている。

このことは一見、些細なことのように思われるかもしれない。だが、トラヴニーの解釈に従うなら、看過しえない重みをもつ。なぜなら、ハイデッガーの思索は、ヘルダーリンやニーチェへの取り組みを通じて、1930年代後半に大きく変化していくが、トラヴニーによれば、これと連動する形で、ナチズムに対する批判が「より激しく」(29)なっていくからである。この傾向はまた、「[ナチズムの]『人種思想』に対して哲学的にもいっそう距離をとった」(66)とも言われるが、とりわけ、人種の生物学的な意義に関して次のように強調される。

したがって、ハイデッガーは明らかに、『民族』の生物学的な育成諸条件への洞察を断念することで、ニュルンベルク人種法の廃止のようなことを要求しているように思われる。「民族」の何たるかは、技術的な組織化によっては成し遂げられない。哲学者は、「民族」の成立を、この時期[1930年代末]、完全に非生物学的な仕方で「現-存在」へと還元する。(67)

「断念 Verzicht」という言い方に、トラヴニーの理解がにじみ出ている。すなわち、以前のハイデッガーは、人種の生物学的な意義を積極的に認め、現存在の必要条件とすらみなしたのだが、思索の変化を通じて、今や「完全に非生物学的な仕方で gänzlich abiologisch」民族のあり方を捉えるようになった、と。このことは、存在史的ユダヤ主義を検討するうえで重要な意味をもつ。というのも、1930年代の終わりに生物学から脱却する視座を獲得したにも拘らず、ハイデッガーは、ユダヤ人を「人種」に結びつけて批判している、とトラヴニーは主張するからである。それこそが、存在史的ユダヤ主義にほかならない。だとすれば問題は、ここでも、この「人種」(あ

るいは「人種主義」の中身である。それらは依然として、生物学的な意義をもつのか。それとも、生物学とは関係のない、まったく別の概念なのか。結論から言えば、年代を区別すべき人種の議論を、しばしば一緒に論じていることからわかるように (vgl. 39f., 45, 68)、トラヴニーはこの問題を曖昧にしている<sup>9</sup>。いやむしろ、うがった見方をすれば、解釈の曖昧さを放置し、「アンビヴァレント」(59) という語に訴えかけることで、ナチ・イデオロギーによる汚染の範囲を最大限広く見積もることができた、と言ってもあながち間違いではないだろう。

この点を個々の事例に即して検証することが、本研究の課題である。以下ではまず、ハイデッガーのフッサール批判をめぐるトラヴニーの考察を見ていく。この問題は、トラヴニーが最初に「黒ノート」の記述に即して検討したものであり、そのショッキングな内容によって、以後の「黒ノート」の議論を方向づけることになった。その意味で、ハイデッガー研究史上、画期的な試みとみなしうる。とはいえ、「文献学的にもはや疑いえない事態」(131) とまで言い切る研究成果が、少なからず誤解に基づいていたとしたらどうか。

## 2. フッサールをめぐる

### (1) フッサールへの「攻撃」

問題となるのは、1939年頃に記された「黒ノート」(「考察XII」)の以下の文章である。

しかしユダヤ教の一時的な力の高まりは、西洋の形而上学が、とりわけその近代の展開のなかで、さもなくば空虚であろう合理性と計算能力の拡張のための着手点を、提供したためである。合理性と計算能力は、そうしたやり方で「精神」のなかに避難所を確保したが、隠れた決断の諸領域をそのつど自ら捉えることはできない。将来の諸決断や問いがより根源的で始源的になればなるほど、こうした「人種」にとってますます接近できなくなる。(だから現象学的考察へのフッサールの歩みは、諸見解の心理学的説明や歴史学的清算に対して際立ち、いつまでも重要なのだ——にも拘わらず、考察はどこにおいても本質的な諸決断の諸領域には達しておらず、むしろいたるところで哲学の歴史学的な伝承を前提にしている。[……] フッサールに対する私の「攻撃」は、彼一人に向けられているのではなく、そもそも非本質的ではない——攻撃は存在の問いの怠りに対して、つまり形而上学そのものの本質に対して向けられているのだ [……]。)(GA96, 46f.)

ここでハイデッガーは「決断」を問題にしているが、それは人間の主意主義的な行為とは関係ない。決断とは「存在者の優位と存在の真理の基づけとの間」(ibid., 47)に楔が打たれることを意味する、存在史的な生起のことである。ハイデッガーはそれを「存在自身の衝撃」(GA66, 24)と考えている。この存在の衝撃的な決断を通じて、「作為性 *Machenschaft*」と呼ばれる存在者の支配的なあり方、つまり存在者を他の存在者による「作り物」とみなす形而上学的な態度から、存在の真理へ向かう「歴史的瞬間」(GA96, 47)が開かれる。ハイデッガーが「計算的思考」と呼ぶのは、存在者を因果的に説明する思考態度のことであり、それは作為性に依拠した近代哲学、および数学的な自然科学の特徴とみなされる。これらを踏まえて引用の前半部をまとめると、近代哲学が計算的思考の展開を準備したために、内実は不明だが、「ユダヤ教」は一時的に優勢となっており、しかしそうしたやり方では「隠れた決断の諸領域」、つまり存在の衝撃が生起する場が開かれることはない、となる。そしてこの流れのなかで、『人種』および「フッサール」につい

での言及が続く。トラヴニーは、「ユダヤ商人 Schacherjude」といった反ユダヤ主義の伝統的な定型句や、20世紀のユダヤ陰謀論の典拠となった『シオン賢者の議定書』に触れた後、この箇所を以下のように解説する。(以下、読解の正確さを期すため、長い引用はドイツ語原文も併記する。)

計算は、ハイデッガーによって、ごく一般的に合理性と結びつけられる。それでもって彼は、彼のかつての師エドムント・フッサールをある歴史のうちに位置づけることができる。その歴史において、①「ユダヤ教の一時的な力の高まり」が、「西洋の形而上学を、とりわけその近代の展開のなかで」決断の喪失へ運命づけている。ハイデッガーはフッサールへの『攻撃』について口にしますが、それを直ちに相対化する。それ〔攻撃〕は②「そもそも非本質的」だ、と。けれども相対化は、最初の位置づけを背景にしては、信用に値しない。フッサールは③『人種』への彼の帰属性に基づいて、「空虚な合理性と計算能力」の歴史のうちに書き込まれているのだ。(37)

Das Rechnen wird von Heidegger ganz allgemein mit der Rationalität verknüpft. Damit kann er seinen ehemaligen Lehrer Edmund Husserl in eine Geschichte einordnen, in der ① eine „zeitweilige Machtsteigerung des Judentums“ die „Metaphysik des Abendlandes, zumal in ihrer neuzeitlichen Entfaltung“, zur Entscheidungslosigkeit verdammt. Heidegger spricht von einem „Angriff“ auf Husserl, den er aber sogleich relativiert. Er sei ② „überhaupt unwesentlich“. Doch die Relativierung bleibt vor dem Hintergrund der initialen Einordnung unglaublich. Husserl wird in eine Geschichte einer „leeren Rationalität und Rechenfähigkeit“ eingeschrieben ③ auf Grund seiner Zugehörigkeit zu einer „Rasse“. (37)

この解釈には、いろいろと問題がある。まず下線部①についてだが、「黒ノート」では、「西洋の形而上学が、とりわけその近代の展開のなかで」提供したのは、「合理性と計算能力の拡張のための着手点」であり、それが「ユダヤ教の一時的な力の高まり」につながった、と書かれている。トラヴニーはこの関係を逆転させ、ユダヤ教が形而上学を「決断の喪失へ運命づけている」と理解する。続いてトラヴニーは、フッサールへの『攻撃』が「直ちに相対化」されると指摘し、そうした姑息な振舞いを示すものとして、下線部②『「そもそも非本質的」だ』という言葉を用いる。この箇所の原文は、Mein »Angriff« gegen Husserl ist nicht gegen ihn allein gerichtet und überhaupt unwesentlich であり、トラヴニーは最後の überhaupt unwesentlich を切り取って「相対化」の根拠にしている。たしかにそれだけ見れば、『「そもそも非本質的」だ』(=「どうでもよい」と理解できるかもしれない。しかし、直後にハイデッガーが、「攻撃は存在の問いの怠りに対して、つまり形而上学そのものの本質に対して向けられている」と形而上学の「本質 Wesen」に言及している以上、überhaupt unwesentlich という言葉には、直前の nicht がかかってくると読むのが自然であろう。つまりこの文章は、「フッサールに対する私の『攻撃』は、彼一人に向けられているのではなく、そもそも非本質的ではない」と読むべきである。ここでは個人攻撃の相対化ではなく、反対にそのような「非本質的」な態度の全否定が意図されている<sup>10</sup>。フッサール

に対する批判は、そのまま、形而上学の歴史の本質に直結し、それがまた、存在の衝撃的な決断の瞬間を「基づける」(GA96, 47) ことにもなる。これがハイデッガーの主張である。

このように、トラヴニーの解釈には粗が目立つ。しかしながら、下線部③の見解は、これらの難点すべてを吹き飛ばして余りあるほどの破壊力をもつ。なぜなら、トラヴニーは、フッサールが「ある歴史」、つまり存在史のうちに位置づけられた理由を、まさしくフッサールの『人種』への帰属性に求めているからである。ハイデッガーは、反ユダヤ主義の定型句にならって、計算的思考をユダヤ人の特徴とみなしており、そうした紛うことなき人種主義の立場から、「空虚な合理性と計算能力」に捕らわれたフッサールの現象学を非難している、と言うのだ。それはまさに、人種主義を内包した存在史的反ユダヤ主義の典型例であろう。仮にこの主張が本当だとすれば、ハイデッガーの哲学的な評価はおろか、その人間性さえ疑われかねない。加えて、この局面での『人種』に生物学的な意義が何かしら含まれているなら、それはナチズムの人種主義に限りなく近いものと言わざるをえない。はたして当該箇所から、このような見解を導き出すことができるのか。

## (2) フッサールの存在史的地位

焦点となるのは、ハイデッガーが括弧つきで記した『人種』とフッサールとの関係である。この問題をより慎重に検討するため、別の箇所でのトラヴニーの見解を引用する。

(フッサールが前年に死亡した) 1939年の「考察ⅩⅦ」でハイデッガーは、「ユダヤ教」の「空虚な合理性と計算能力」について話している。この精神的刻印にふさわしいのは、「将来の諸決断や問いがより根源的で始源的になればなるほど」、「この『人種』には」「ますます接近できない」ことだ。「だから」フッサールの思惟は、「どこにおいても本質的な諸決断の諸領域には」達して「いない」。[……] / フッサールの思惟は「本質的な諸決断」の外部にある。なぜならそれは、抽象的で計算的なもの、ユダヤ人たちという「この『人種』」の精神のあり方のうちに漂ったままであるから。(87)

In den „Überlegungen XII“ aus dem Jahre 1939 (Husserl starb ein Jahr zuvor) spricht Heidegger von der „leeren Rationalität und Rechenfähigkeit“ des „Judentums“. Dieser Geistesprägung entspreche es, dass „je ursprünglicher und anfänglicher die künftigen Entscheidungen und Fragen“ würden, diese „dieser ‚Rasse‘“ „um so unzugänglicher“ blieben. „So“ reiche Husserls Denken „nirgends in die Bezirke wesentlicher Entscheidungen“. [...] / Husserls Denken steht außerhalb „wesentlicher Entscheidungen“, weil es im Abstrakten und Kalkulierenden, der Geistesart „dieser ‚Rasse‘“ der Juden, hängen bleibe. (87)

冒頭のフッサールの死についての言及は、ハイデッガーの不義理、あるいは無神経さを印象づける。師が亡くなった翌年にこんな文章を書いていたのだ、と。その核心が下線部である。引用符付きの「だから」は、まさしく『人種』と「フッサール」を結びつける。トラヴニーによれば、ユダヤ人は「抽象的で計算的なもの」という人種的な「精神のあり方」ゆえに、存在の決断

領域には近づくことができない。「だから」ユダヤ人フッサールもこの領域の外部にとどまっている、となる。ここでは、先ほどと同じ見解が披露されているわけだが、その試金石は、ひとえに、「黒ノート」から直接引用された接続詞「だから So」に置かれていると言えよう。では「黒ノート」ではどう書かれていたか。この点は重要なので、当該箇所をもう一度引用する。

しかしユダヤ教の一時的な力の高まりは、西洋の形而上学が、とりわけその近代の展開のなかで、さもなくば空虚であろう合理性と計算能力の拡張のための着手点を、提供したためである。合理性と計算能力は、そうしたやり方で「精神」のなかに避難所を確保したが、隠れた決断の諸領域をそのつど自ら捉えることはできない。将来の諸決断や問いがより根源的で始源的になればなるほど、こうした「人種」にとってますます接近できなくなる。(だから現象学的考察へのフッサールの歩みは、諸見解の心理学的説明や歴史学的清算に対して際立ち、いつまでも重要なのだ——にも拘わらず、考察はどこにおいても本質的な諸決断の諸領域には達しておらず、むしろいたるところで哲学の歴史学的な伝承を前提にしている。[…]) (GA96, 46f.)

Die zeitweilige Machtsteigerung des Judentums aber hat darin ihren Grund, daß die Metaphysik des Abendlandes, zumal in ihrer neuzeitlichen Entfaltung, die Ansatzstelle bot für das Sichbreitmachen einer sonst leeren Rationalität und Rechenfähigkeit, die sich auf solchem Wege eine Unterkunft im »Geist« verschaffte, ohne die verborgenen Entscheidungsbezirke von sich aus je fassen zu können. Je ursprünglicher und anfänglicher die künftigen Entscheidungen und Fragen werden, umso unzugänglicher bleiben sie dieser »Rasse«. (So ist Husserls Schritt zur phänomenologischen Betrachtung unter Absetzung gegen die psychologische Erklärung und historische Verrechnung von Meinungen von bleibender Wichtigkeit — und dennoch reicht sie nirgends in die Bezirke wesentlicher Entscheidungen, setzt vielmehr die historische Überlieferung der Philosophie überall voraus; [...].) (GA96, 46f.)

ハイデッガーはたしかに、『『人種』』が存在の決断領域に到達できないと言っている。とはいえ、この括弧付きの『『人種』』を、直ちにユダヤ人に結びつけることはできない。この語は文脈上、「合理性と計算能力」に依拠した者、すなわち近代哲学の展開のなかで作為性に支配された近代人、あるいは近代的な人間理解のことを指している。そこに人間を「人種」と捉える生物学的な見方も含まれる。ハイデッガーが直後に、「全ての人種思想は近代的であり、基体としての人間把握の軌道を動いている」(ibid., 48)と指摘するのはそのためである。以上のことは、トラヴニーも触れている。彼によれば、『『人種』』に付された括弧は、近代的な作為性に規定されたナチズムからの「距離」を示しており、そのため、『『人種』』に基づいたフッサール現象学への評価は「間接的」なものとなる(39)。だとすると、ハイデッガーは、自らが拒絶するナチズムの優生学的な人種思想を利用して、フッサールを批判していることになる。この奇妙な身振りを可能にするものとして、トラヴニーが持ち出すのが、「生物学的な意義を疑っていない」と言われた総長期の人種論、つまりは現存在の必要条件と位置づけられた「人種」概念である(39f.)。けれども、1930

年代末と総長期の間には、「生物学からの脱却」という無視できない思想上の変化が指摘されていた。トラヴニーはそのことに一切触れず、「人種主義」の名を背景に、反ユダヤ主義の汚染の深刻さをほのめかす。ここに、先ほど触れたトラヴニーの戦略の一端を見ることができるだろう。

だがそれ以上に、見過ごすことができないのは、この局面でのトラヴニーの論の運び方である。彼の見解をもう一度約言すれば、〈ユダヤ人は人種的に存在の決断領域に近づけない。「だから」フッサールの思惟はその外部にとどまる〉となる。たしかに、原文を読めば、ハイデッガーは、『人種』に続き、丸括弧内の冒頭に「だから」を記している。けれども、この接続詞が導くのは、明らかに、「現象学的考察へのフッサールの歩みは、諸見解の心理学的説明や歴史学的清算に対して際立ち、いつまでも重要なのだ」という文章である。ここで「現象学的考察へのフッサールの歩み」と対置された、「心理学的説明や歴史学的清算」とは、フッサールが格闘していた心理主義や歴史主義を指し、ハイデッガーの立場から見れば、それらは、ナチズムの人種思想と同じく、近代的な計算的思考に属する。したがって、ここで言われていることをパラフレイズすれば、「合理性と計算能力」の支配的な展開のなかで、ますます存在の決断領域への道が閉ざされていく時代だからこそ、そうした潮流に抗うものとして、フッサールの歩みは「いつまでも重要なのだ」となる。ところがトラヴニーは、「だから」が導くこの帰結部をカットし、ダッシュ以降に接続する。このほとんどアクロバティックとも形容しうる編集作業の結果、件の人種主義的な見解が成立するのだ。ハイデッガーの主張は違う。むしろ作為性の支配に抗して始まったフッサールの現象学的考察さえも、「哲学の歴史学的な伝承」のうちに捕らわれてしまった、というものである。そしてそのことは、決してユダヤ人の人種的な「精神のあり方」に起因せず、偉大な師フッサールをも巻き込む、形而上学の歴史の本質的な支配力を示している<sup>11</sup>。以上がこの箇所の大意であろう。このようなハイデッガーの見立てにおいて、トラヴニーの言うように、フッサールは存在史のうちに位置づけられている。ただしそれは、ユダヤ人としてではなく、哲学者フッサールとしてである。

### むすびにかえて

本稿では、トラヴニーの主張する存在史的な反ユダヤ主義を、とくに人種主義の観点に即して検討してきた。検証の結果、主に以下の4点が明らかになったかと思われる。①トラヴニーは、総長期の「人種」概念のうちに生物学的な意義を見出す一方で、②1930年代後半の思想の変化と連動した「生物学からの脱却」を指摘する。③フッサールに対する批判は、人種主義的なものとされ、そこにナチ・プロパガンダの影響が示唆される。ただし、④これらの議論は、全体として、テキスト読解上の問題を抱えており、直ちに受け入れることはできない。筆者は、そもそも総長期の人種論自体、当時の生物学主義的な人間観に対する批判であり、こうした態度は、ハイデッガーの思索を一貫するものと考えている。この時点で、見解の相違は明白だが、それにも拘らず、本稿はあえてトラヴニーの議論を丁寧にとどめてきた。その理由は、フィガールのような高名な研究者までも、これに準じた見解を示している現状に対し<sup>12</sup>、ある種の危機感を抱いたためである。もとより、筆者とて、昨今の反ユダヤ主義の台頭を警戒するとともに、ナチズムの危険性について理解している。ただ、当時支配的であった人種主義に対し、大学総長という立場にありながら、批判を展開したハイデッガーの思索が顧みられることなく、あまつさえ正反対の立場に追いやられている状況が、訝しく思われるのである。

これは政治や倫理、あるいはイデオロギーの問題ですらなく、哲学研究の問題である。さらに言えば、哲学文献への向き合い方の問題である。もちろん、本稿で取り上げた論点は、トラヴニーの主張のほんの一部にすぎず、これをもって全面的に論駁できるなどとは考えていない。とはいえ、本稿の試みだけでも、トラヴニーの著作に対する何かしらの注意喚起ぐらいにはなるだろう。筆者は、引き続き、「存在史的反ユダヤ主義」に関する検証作業を行っていくが、それはあくまで、ハイデッガーの隠された思索に光をあてるためである。この取り組みが、ハイデッガー研究に少しでも寄与するところがあれば幸いである。

### [凡例]

トラヴニーの『ハイデッガーとユダヤ世界陰謀の神話』(Peter Trawny, *Heidegger und der Mythos der jüdischen Weltverschwörung*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 2015, 1. Aufl. 2014) からの引用や参照については ( ) 内にページ数を示す。ハイデッガー全集 (Martin Heidegger, *Gesamtausgabe*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1975ff.) の場合は、略号 GA の後に巻数、頁数を示す。引用文中の強調と ( ) 内は原著者、下線と改行を示す／および [ ] 内の補足は筆者による。略号は以下の通り。

GA38 *Logik als die Frage nach dem Wesen der Sprache*, 1998

GA66 *Besinnung*, 1997

GA94 *Überlegungen II-VI (Schwarze Hefte 1931-1938)*, 2014

GA96 *Überlegungen XII-XV (Schwarze Hefte 1939-1941)*, 2014

GA97 *Anmerkungen I-V (Schwarze Hefte 1942-1948)*, 2015

### [謝辞]

本研究は科研費「若手研究」(19K12943 ハイデッガー「黒ノート」におけるユダヤ問題の研究——形而上学批判を基点として) の助成を受けたものである。

### 註

<sup>1</sup> 「黒ノート」のユダヤ批判に関して、ヴィエッタは「ユダヤ人エリート」に限定したものだ主張し (Silvio Vietta, *»Etwas rast um den Erdball...« Martin Heidegger: Ambivalente Existenz und Globalisierungskritik*, Paderborn: Wilhelm Fink, 2015, S. 22)、ヘルマンは存在史的思索にとって「まったく重要でなく、ゆえに余計だ」と見ている (Friedrich-Wilhelm von Herrmann, „Notwendige Erläuterungen zu den *Schwarzen Heften*. Über die naive Instrumentalisierung hinaus, die aufgrund der Mutmaßungen bequemer Einsichten inszeniert wurde“, in Friedrich-Wilhelm von Herrmann u. Francesco Alfieri, *Martin Heidegger. Die Wahrheit über die Schwarzen Hefte*, Berlin: Duncker & Humblot, 2017, S. 39f.)。

<sup>2</sup> Peter Trawny, „Denk-Zeit oder: Warum fragen „wir“ nach der Zukunft von Heideggers Denken?“, in Alfred Denker u. Holger Zaborowski (Hgg.), *Jenseits von Polemik und Apologie. Die „Schwarzen Hefte“ in der Diskussion*, Heidegger-Jahrbuch 12, Freiburg/München: Karl Alber, 2020, S. 10.

<sup>3</sup> Vgl. Eugenio Mazzarella, *Die Welt am Abgrund. Heidegger und die Schwarzen Hefte*, übersetzt v. Gabriel Jira, Baden-Baden: Ergon, 2020, S. 29.

<sup>4</sup> Peter Trawny, „Denk-Zeit oder: Warum fragen „wir“ nach der Zukunft von Heideggers Denken?“, op. cit., S. 16.

<sup>5</sup> この点については、拙論「ハイデッガーの人種論——総長期の思索を中心に」『現象学年報』第 35 号、日本現象学会編、2019 年、73 頁以下を参照。なお筆者は、現存在の「必要条件」と言われた総長期の「人種」

概念を、生物学的なものではなく、実存論的な身体論に属する「実存カテゴリー」と見ている(同上、69頁以下参照)。

- <sup>6</sup> トラヴニーは、「黒ノート」(「考察Ⅲ」)の「『人種』(生得的なもの)の力」という表現を引き合いに出し、総長期のハイデッガーが人種の生物学的な意義を受容していた点を補強している(62)。だが、当該箇所では、「『人種』(生得的なもの)の力のうちに真理が存するなら、ドイツ人は自らの歴史的な本質を喪失するだろうし、喪失するはずだ」(GA94, 168)と、むしろネガティブな事態が語られている。ハイデッガーと人種主義イデオロギーとの関係については、オットやザフランスキーによる伝記も参照されたい(フーゴ・オット、北川東子／藤澤賢一郎／忽那敬三訳『マルティン・ハイデッガー——伝記への途上で』未來社、1995年、276頁以下。リュディガー・ザフランスキー、山本尤訳『ハイデッガー——ドイツの生んだ巨匠とその時代』法政大学出版局、1996年、375頁以下)。
- <sup>7</sup> トラヴニーは存在史的反ユダヤ主義を反ユダヤ主義の「一般的に知られた諸形式」に即して三つのタイプに分類している(vgl. 31)。それらは伝統的、人種主義的、陰謀論的なタイプと呼ぶことができるが、互いに連関しており、明確に区別することは難しい。
- <sup>8</sup> こうした時期の違いゆえに、トーマは、「黒ノート」の「反ユダヤ主義的」な記述について、「彼[ハイデッガー]がナチズムに向くことと直接つながってはいない」と指摘し、むしろナチズムからの離脱が背景にあると見ている(vgl. Dieter Thomä, „Wie antisemitisch ist Heidegger? Über die *Schwarzen Hefte* und die gegenwärtige Lage der Heidegger-Kritik“, in Marion Heinz u. Sidonie Kellerer (Hgg.), *Martin Heideggers »Schwarze Hefte«. Eine philosophisch-politische Debatte*, Berlin: Suhrkamp, 2016, S. 215, 221ff.)。
- <sup>9</sup> Vgl. auch Peter Trawny, *Martin Heidegger. Eine kritische Einführung*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 2016, S. 97.
- <sup>10</sup> 当該箇所の英訳も My “attack” on Husserl is not directed to him alone and is not at all directed inessentially と全否定の意味で取っている(Martin Heidegger, *Ponderings XII-XV. Black Notebooks 1939-1941*, translated by Richard Rojcewicz, Bloomington: Indiana University Press, 2017, p. 37. 下線は引用者による)。
- <sup>11</sup> フッサールに対するこのような評価は一貫していると思われる。1930年代前半の「黒ノート」(「考察Ⅱ」)では、「現象学者たち(フッサールとシェーラー)は、一つのことを成し遂げた。すなわち、彼らは直接的で——事柄それ自身の方を向いた認取(直観・本質)を、つまり古代の何かしらの態度を、目覚めさせた。しかし、根がなく、19世紀に従属する仕方——19世紀の諸図式や『諸問題』のなかで」(GA94, 50)と言われ、また1948年頃の「黒ノート」(「注釈Ⅴ」)でも、「1890年から1900年の当時、フッサールは『論理学研究』を通じて一人の教師であった、たとえこの研究の基礎が、まだまったく、意識論の伝統的な領野を動いていたとしても。彼はここで、空虚で偶然的な議論や歴史学的な主張の一切に抗して、単純に、見させることへの歩みを敢行したのであり、それが彼の歴史的な地位であることに変わりはない」(GA97, 443)と記されている。
- <sup>12</sup> Vgl. Günter Figal, „Radikalität. Zur Interpretation von Heideggers *Schwarzen Heften*“, in David Espinet, Günter Figal, Tobias Keiling u. Nikola Mirković (Hgg.), *Heideggers „Schwarze Hefte“ im Kontext*, Tübingen: Mohr Siebeck, 2018, S. 25-35. 最近では、「学生たちはハイデッガーの研究から離れるよう警告されている」と言われるように、学術研究の場からハイデッガーを締め出そうとする動きも見られる(cf. Gregory Fried, “How Dare We Read Heidegger? After the *Black Notebooks*,” in Alfred Denker u. Holger Zaborowski (Hgg.), *Jenseits von Polemik und Apologie*, op. cit., S. 19)。